

『満洲の記憶』 創刊によせて

満鉄会情報センター専務理事 天野博之

◇ 昭和 20 年 8 月 15 日

この日を、私は吉林市江北在満国民学校 4 年生として迎えた。

午前中の作業を終えた私たち 4 年生以上は、重大放送があるということで、体を洗って講堂に整列した。ラジオから流れる天皇の声は今までに聞いたことがないイントネーションで、ほとんどその言葉を聞き取ることはできなかった。

教室に戻って担任の女の先生から、日本が戦争に負けたこと、明日から休校になることを涙ながらに告げられて、家路についた。途中で出会った「満人」の物売りの車の梶棒に早くも青色の旗（青天白日旗—中国国民政府の旗）が掲げられていたことを憶えている。

日本内地では、敗戦を終戦と言い換えたが、満洲はもちろん、外地ではそれまでの日本人の地位は現地人と一日にして逆転したのであり、「敗戦」という言葉こそがふさわしい。

◇ 失われた記憶と記録

あの日から、間もなく 70 年を迎えようとしている。

当時 10 歳だった私も、間もなく満 80 歳である。当時働き盛りの 37 歳だった父が 20 年前に亡くなったように、満洲を肌で知っていた「現役」の人々の多くは鬼籍に入ってしまった。満鉄社員だった父は、13 年間の満洲時代のことを多くは語ろうとしなかった。そのような人は多い。

昭和 30 年代前半に大学生生活を送った私も、満洲帰りであることを積極的には語らなかった。「帝国主義的侵略者」のお先棒を担いでいた者の子弟、という負い目があったからである。私が学んだ歴史学の教室は、「進歩」的な空気が充満していた。

このようにして、貴重な記憶と記録の数々が埋もれてしまったことは、今考えると、非常に残念である。

◇ 心強い「満洲の記憶」研究会の発足

今ここに、大学院生からなる「満洲の記憶」研究会が誕生したことは、大変喜ばしいことである。満洲の記憶を記録するときは、今をおいてはない。新鮮な視点から、多種多様な満洲の記憶を掘り起こしていただきたい。

「満洲の記憶」研究会が主催して11月2日の一橋大学文化祭で行われた、満洲からの帰国者3人の報告とその後の質疑応答は、会場に入りきれない人が出る大盛況となった。

私たち報告者と同世代の方も多かったが、2割ほどは若い世代であるように見受けられた。私の娘たちは満洲に関心はないし、彼の地で生まれ幼年時代を過ごした4人の弟も、満洲への関心はほとんど持っていない。そんな時代の風の中、研究会の誕生は、まことに心強い限りである。私もできるだけのお手伝いをさせていただきます。

今後の会の活動の中心は、当面、満洲に在住していた人、引揚げてきた人からの聞き取り調査になるであろう。ただ心していただきたいのは、聞き取り対象者の記憶の喪失とその補填の問題である。わかりやすく言えば、記憶の間隙を、知らないことは知らないと言ってくれればよいのだが、他人の話、あるいは読んだ文章を自らの体験と思いついで語ることである。もちろん悪意からではないのだが。政治家や文学者などと異なって、資

料の少ない極めて個人的な体験を検証することは非常に難しい。この点を、どう克服するか。場数を踏むこと、時代相、時の環境を考慮して聞くことが重要になるだろう。活字として発表する場合、一人歩きされることを念頭に置いておいていただきたい。

◇ 今後の満鉄会

昭和21年末に発足した満鉄会(財団法人を経て現在は満鉄会情報センター)は、2016年3月をもって解散することが決定している。最盛期には1万数千名の会員を誇ったが、会員の高齢化とともに、会を支える後継者難と、財政的な逼迫が解散の主要な原因である。

満鉄は、満洲の日本勢力の草分けであり、約70年の歴史を持つ満鉄会は、旧満鉄社員の精神的支柱、満鉄資料の返還運動、あるいは厚生年金受給のための証明書発行などを担ってきた。250号を数える『満鉄会報』は貴重な記録の宝庫である。

解散後は、所蔵資料を国会図書館などの公的機関に移譲するので、今後の満鉄、満洲研究の一助としていただきたいと念願している。

追記

基本的には西暦を使用する私ですが、1か所を除いて和暦を使用しました。昭和20年は昭和20年で、決して1945年ではありません。